

時を泳ぐ人

MURATA CHIHIRO exhibition
2014.7.15Tue.~7.27Sun. 11:00~19:00 closed on Mon. / until 20:00 on Fri. / until 18:00 last day

ギャラリー・パルクでは、様々なクリエイション活動へのサポートの一環として、広く展覧会企画を公募し、審査により採択された3名(組)のプランを実施するコンペティション「ギャラリー・パルクアートコンペティション2014」に取り組んでまいりました。本シリーズ企画展は、およそ1ヶ月の期間に応募いただいた四十四のプランから、平田剛志(京都国立近代美術館研究補佐員)、山本麻友美(京都芸術センタープログラムディレクター)の2名の審査員を交えた厳正な審査により採択された、葉師川千晴、むらたちひろ、松本絢子・山城優摩・森川稜の3名(組)による展覧会を連続開催するもので、本展はその第二弾となります。

むらたちひろ(一九八六年・京都府生まれ)は、高校から染織に親しみ、二〇一二年に京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻修士課程修了以降も現在まで一貫して染織を手がけていますが、その注目は常に「絵画表現」にあるといえます。むらたは「目に見える景色は、変化し続ける世界のごく一部を切り取ったものにはすぎない」として、一旦は布に染めた絵(絵画)を再び水によって変化・染みさせ、そこに現われた力タチを定めない流動的な世界を再び布に写し取ります。現実の世界を切り取りながらも、そこに偶然や必然が介入するこのプロセスは、目に見えていた世界に、むらたの夢想や潜在意識までもが縋い交せとなったようなイメージを描き出します。また、それらは「布」として、カーテンとして吊られたり、空間を間仕切ったりと、あたかも「風景の一部」としても空間に存在しています。これらは「布のある風景」として、作品(絵画)にとどまらず物としての存在感を与えることができるかという試みでもあり、世界の一部を切り取った絵画を再び世界の一部に組み戻すかのような構造を提示しています。

染織による淡く染んだ色彩や布の透過性は、展示空間の特徴や時々の光の強弱あるいは鑑賞者の記憶や意識の影響を受けて、さらに不確かなイメージを見せはじめます。それは想像や空想の世界のようでありながら、どこか現実の世界と地続きである予感を覚えさせます。そうして目に映る世界と自身の心象風景が交錯し、時にまったく別の何かの姿をも垣間見せながら、その時の日差しに左右されて変化する染みや澱み、透明な余白に見るイメージは、まるで揺らぐ水面を覗き込んで見たイメージのようにも思えます。

「現実のなかにまじっている夢や潜在意識の存在を受け入れれば、『時を泳ぐ』こともごく当たり前でできて、それは受け入れがたい現実と直面したときの救いになると思う」。

本展「時を泳ぐ人」は、おもに「水」をテーマに制作した染織(絵画)作品と空間(世界)との間に位置するものです。そしてそれは、むらたちひろの「染織作家として絵画表現の可能性を考える」とするプロセスにも位置づけられるとともに、合わせ鏡の中で、私と世界との距離や位置関係を探る試みでもあるといえます。

淡々と飄々と…山本麻友美(京都芸術センタープログラムディレクター)

今流行の歌ではないけれど、**「ありのまま」**で生きていくためには、薄っぺらな開き直りではどうしようもなく、本心に厳しい強さが必要だ**と思う**。むらたちひろの作品の印象は、自然体であるけれどそのような強度を持っていてのではないかと予感させるものだった。

今回展示されている作品はどれも、日常から切り取られたモチーフ、構成も色合いも、すんなりと見る人に馴染む。夢なのか現実なのかは判然としないけれど、その世界観に大きな違和感はない。ほんの少しだけ狂気を漂わせる場合もあるが、それはすぐに消えてしまふ。

「現実のなかにまじっている夢や潜在意識の存在を受け入れれば、『時を泳ぐ』こともごく当たり前でできて」と彼女が言う。作品を見るまで、「時を泳ぐ」という言葉に対してゆったりと流れに逆らわずに、といった幾分牧歌的なイメージを持っていた。でも本当は、溺れそうな時に如何にサバイブするかといった危機的な状況を指しているのではないか。私たちは溺れそうなのかもしれない。少なくとも彼女は溺れそうになったことがあるのだらう。

テキスタイルというメディアは、支持体として可変であることから、実はとても自由度が高い。だからこそ、美術作品として扱われる場合には、さまざま困難や誤解が付きまとう。むらたが、自分の表現としてテキスタイルおよび染色を選んだことは、ある種の必然であると言える。「一旦染めたものを、再び水によって滲ませるといった技法は、すべてが揺らめいて、確かなものは何もないと語っているようだ。また、ロウケツ染めの上に型染めを重ねるといったことから、自分の中で何かバランスを取ろうとしていることがうかがえる。ただし、彼女の作品には、まだ開かれていない可能性の余地があるように思う。今回の展覧会で平面、カーテンやインスタレーション等の形態を取り入れたことは、よい経験になったのではないだろうか。

むらたちひろは、すべてが、淡々と飄々としている。人は、自分と世界との関係においてバランスを取ろうとする時に、立ち向かう、あきらめる、寄り添う、受け入れる等のさまざま態度に出る。むらたは、きつとすんなりと受け入れるための努力をしてきたのだらう。そうでなければ乗り越えられないようなものに直面して、熱く訴えかけてくるものはないが、作品が静かに強くそう言っているように聞こえた。

【アーティストメント】

川を泳ぐ。わたしが泳ぐよりも強い力で川の流れは変わるから流されないよう、上手く泳ぐ訓練をする。

海を泳ぐ。延々続く海岸で、ずっと先を泳いでいた人が泳ぐのを止め、浮き輪を漂い始めた。

プールを泳ぐ。せーので飛び込んだ彼女のレーンは5mで、私のレーンはまだ続いている。ただそれだけのこと。

記憶、空想、勘違い。目に見えるものよりも強く影響されることがあります。

現れては消えるそれらを都合よく解釈して生きている私は、いつたい何を見ているのでしょつ。

【略歴】

1986年京都市生まれ / 2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻修士課程修了

2013 「染+わたにまじりつるそのめのはし」清流館(京都) / 「第19回 染・清流展」清流館(京都) / 「八重の桜にちなんで ハンサンマン」19 パパフルな女性作家たち「清流館」(京都)

2012 「紙技」(雅景維・京都) 時折・夜(計画) / 「ART AUCTION STORY vol.4(関田田仏学館・京都) / 「Kyoto Current 展」(京都市美術館別館・京都) / 「Abend vol.1」(Gallery Ort Project・京都) / 個展「水たまりバルバド」(Gallery Ort Project・京都) / 内藤英治(福井市)展「若手埋染作家展」(京都芸芸大ギャラリー@KUCA・京都)

2011 「LOVE THE MATERIAL ITEMS XII」(pepper's gallery・東京) / 「ローハンバーク」(Gallery Ort Project 受賞歴)

2011 京都市立芸術大学制作展・同窓会賞 / 2009 京都市立芸術大学制作展奨励賞

【展示作品】

01 **せしせし**
ロウケツ染め・糊型染め・複合技法・綿布・反応性染料

02 **unchained times #05**
ロウケツ染め・糊型染め・複合技法・綿布・反応性染料

03 **seapoolriver#01~03**
ロウケツ染め・糊型染め・複合技法・綿布・反応性染料

04 **my head is swimming**
ロウケツ染め・糊型染め・複合技法・綿布・反応性染料

05 **漂泊**
ロウケツ染め・糊型染め・複合技法・綿布・紙紐・反応性染料

06 **起時抜けの罫**
ロウケツ染め・糊型染め・抜染・複合技法・綿布・反応性染料

07 **unchained times #01**
ロウケツ染め・糊型染め・複合技法・綿布・反応性染料

*1階入り口部分作品

